



そもそも「和」って何？

寺下邦彦

前回「和食って何？」を話しましたが、その後、気になりだしたのが「なぜ日本を和と呼ぶの？」みなさん、ご存知ですか？

古代、この地に住む集落をつくっていた人々は、われわれの地として「わ」と呼んでいたとか。

三国志の時代から、隋からとたびたび使者が訪れているようで、属国であったのでしょうか？

この国の名前は住民たちが「わ」と呼んでいる、ということから漢字で『倭』と記載し、『隋』の皇帝が認めたものを『倭の王』とする。というのが慣わしとなったようだ。

さてなぜ、侵略されなかったのでしょうか？当時の邪馬台国は50万人もの人民を抱えた強大な社会であった。

後の神武天皇率いる「部族」に邪馬台国は滅ぼされ吸収されていくことになった。という説がある。

こうして、さらに大きい社会を天皇が統治するようになって今の「大和」に都をおくようになる。それから3~400年の年が過ぎ、西暦605年ころ、聖徳太子は、「和を以て尊しと成す」という17条の憲法を制定する。そして、この地を「和」と漢字で表記するようになったという。

ここでいう「和」は国のことで、そこに住む民のことだったのですね

大和王権(朝廷)が統治していた「和」とは、大陸とは違うという意味もあったので、後に地名を

とって「大和(やまと)」と国名を定めます。

大和朝廷は「唐」に使いを出し『日の出ずる国の天使より日の没する天使へ』という親書を持たせます。そりゃあ、怒るでしょう。案の定、唐の皇帝は大変怒ります。

属国の王が、天皇を名乗っている上に、失礼な物言い！

「日の本の国ってか。ありえない」

ところが、大和朝廷は実はグローバルな目で隣国を注視していたのですね。

唐は、朝鮮半島の「高麗」と戦争をしていました。

「百済」ともややっこしい状態だったようです。

実際この時、大和朝廷は、大船団を保有し多くの人民を統治していた。実は巨大な国だったそうです。そんな「大和朝廷」を敵には回したくなかったわけですね。

朝廷の読みは、見事に当たり、同盟を結ぶことになりました。

大和朝廷は、国号を「日本(やまと)」とし、ここに世界で唯一の単一国として、1300年の歴史の日本国が誕生します。

どうでしょう、思いをはせてみませんか？邪馬台国は突然歴史から消えます

どうしてでしょう？古事記、日本書紀にも出てきません

和を統一させてヤマトの国を打ち立てた天皇より前に、別の部族のヤマトの王がいた、ではまずいですよね。さらに、邪馬台国は中国での表記。もともと日本に、このような呼び名の国はなかったのでは？あくまでも、“やまと”だった。という説もあります。実に興味深い。

さて、「和食」につながってきました…？

食の歴史は、日本国より古く、2000年以上伝承されてきたことから「和」を持ってあrawす。

先人たちの知恵に尊敬をこめて伝統の味を継承していくべきだ。そういう思いが込められているのでしょう。

そして私たちもまた、後世に伝えていかねばならないと考えています。

(この原稿は、正直何回も書きなおしプレゼンでも初めから何回も変わっています。調べれば調べるほど訳が分からなくなってきました。でも予想していた以上にヤマトの国は大きく力があつたと思われます。農耕民族であり、のんびりと細々暮らしている古代人を想像していただけにびっくりです。)

※10月24日第3回食育委員会プレゼンテーションより



ちぎりパン(製作 九鬼えりか)

給食、のどに詰まらせた女兒が入院先で死亡 大阪市立小学校

大阪市立小学校1年の女兒が給食のおかずをのどに詰まらせて意識不明の重体となっていた事故で、女兒が入院先の病院で死亡していたことが29日、市教委への取材で分かった。

市教委によると、女兒は24日に死亡した。女兒は11日午後、給食でおかずの「鶏肉と野菜のうま煮」を食べている際に、のどを詰まらせた。学校からの119番で駆けつけた救急隊員が搬送中の救急車内でウズラの卵を取り出したが、女兒は意識が戻らない状態が続いていた。市教委は各学校に事故が起きた場合の対処法などをまとめた注意喚起の通知を出すという。（産経ニュース）

山本） 救急車の中で隊員がウズラ卵を意識混濁状態の小学生から取り出した、殆ど嚙んでいないのか？早く遊びたいが為に早食いをして飲み込むのか？あるいは、咬合が悪くかめなかったのか？

低学年は高学年と比べ、カロリーも考えないといけません、食材の大きさも配慮が必要なのではないかと感じています。もしも今後この様な場面に遭遇した場合はバキュームがわりの掃除機利用、胃を押しながらに逆さまにする、近くの医院と提携するなど、マニュアルをあらたに作製する方向で検討されるみたいです。しかし、いつか早食いは何かを引き起こす、嚙まないと、嚙む時間が必要であるので**給食の所用時間の見直し**を担当小学校では課題に挙げていました。

関） 給食の時間の短さにも問題があると思います

6学年すべて同じメニューでも上顎前歯が交換途中であるためにかみ切ることが困難ではないですか。

ウズラの卵に関してはかみ切るというよりも臼歯にうまく乗らなかったのかなあとおもいますね。

咀嚼回数を増やすことが大切で、さもないと又、痛ましい事故がおきてしまうのではないのでしょうか」

寺下） 給食の時間が短いのではないかと。といった意見は確かにそう思います。

「安全に食べることは、よく嚙むこと」でもあるのですよ。と付け加えるべきですね。

学校給食に対しては、「正しい姿勢で、よく嚙んで食事の時間を長くとりましょう」と呼び掛けていきたいと思えます

山本） 小学生のお子さんが居るスタッフ三人とこの事故に付いて意見交換をしました。

ある大阪市内の小学校では低学年と高学年の給食メニューは殆ど一緒に、低学年には柔らかめに調理しているらしいです。

堺市内のある小学校ではその日に頂く給食メニューの中で嫌いな物が有るなら残しても良いらしく、家庭では“カミカミ、ゴクン”と指導している様です。嚙下をしっかりと出来るまで嚙む、これが今回の悲しい事故防止に繋がるのでは？という意見がありました。給食は教育の一貫なので、食べ方や姿勢に配慮しながら、食材が口の中で小さくなり無理なく自然な形で飲み込めるまで嚙むように指導が必要かと思えます。唾液の出方にも個人差があるので咀嚼嚙下のしやすさにも個人差が有るということです。

以上の事をこなせる様な給食の時間を各々の学校単位で、生徒の食べている様子を伺いながら、考えて頂くのが理想です。学校の始業や下校時刻が決まっている中での生活ですから、難しい面も有るでしょうが、生徒の安全と健康に留意しながら楽しく有意義な学校生活を送れるよう願っています。

竜門）『給食時間を長く』という話ですが、**ちょっと気になる**ことがあります。

給食時間を長くする＝昼休みが長くなる、ではないと思うのですが、単に時間を長くするだけだと、子供たちは、食べる時間ではなく、遊ぶ時間を長くしようとして、結局、早食いが解消されないのかもしれないと思ったんです。

♪ ねんねんころりよ おころりよ 坊やはよい子だ ねんねしな
 坊やのおもりはどこへ行った あの山越えて里へ行った
 里の土産になにもろた でんでん太鼓に笙の笛 ♪

「江戸の子守歌」という歌ですが、作曲は八橋検校(やつはし けんぎょう)という江戸時代中期の音楽家だといわれています。

検校は、箏(そう・こと)の楽曲を勉強して、その多くを作曲した方だといえます。

箏という楽器は、我々の知っている琴のことです。

箏と琴は微妙に作りが違うそうです。

検校は晩年、京都で過ごしたので、死後多くの煎餅屋が検校をしのいで、琴の形に見立てた煎餅を売り出したのが『八つ橋』の発祥だということです。

(記 寺下邦彦：参考 浄土宗新聞)

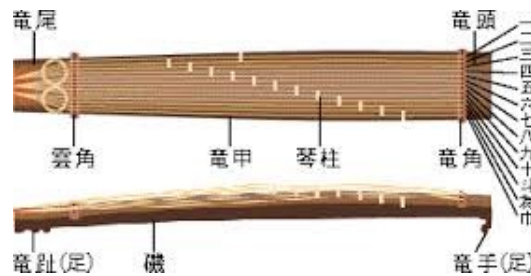
箏・・・「中国(唐)より雅楽の演奏用として、伝来した13弦の弦楽器。

現在では、「おこと」と呼ばれ、お正月にはテレビなどからその音色をよく耳にします。繊細な美しい音色を特徴とし、比較的演奏しやすい楽器です。もともとは貴族階級の楽器でしたが、江戸時代からは武家・裕福な市民階級にまで広まり好まれました。現在、最も一般に普及している邦楽器と言えます。

箏の各部には竜の名前が付けられています。それは箏が高貴な生き物と崇められていた竜に似せて作られた事に由来しています。」



でんでん太鼓



笙の笛

編集人メモ

このたびの給食事故についての情報は、当会学術委員会担当常務理事水谷先生よりいただいたものです。二度と同じような事故を起こしてはなりません。ヒヤリハット事例は学校現場ではあると思います。

第3回 府学歯食育推進委員会を開催させていただきました。次号府学歯報で報告させていただけると思います。その中で、高橋会長は「子供たちが自らが気づき、解決する力をはぐくまなければならない。私たちがあれこれ指示するのではなく、考えるもとになる材料を提供することだ」とおっしゃられました。解決法を我々が指導するのではなく、生きる力をはぐくむ「もと」になる知識や、安全ではないこと、問題点等を教示することで子供たちが自ら気づき、考え、行動できるようになることが大切であるということです。(寺下)



私の本棚 2

河合繁一 選書



「いのちをはぐくむ農と食」(岩波ジュニア新書)小泉 武夫 (著)

1年間に農業に就く後継者が5000人を割り、食料自給率も40%を割った。しかも、食品の安心・安全にも不安が大きい。そんな日本の農と食に未来はあるのだろうか。各地で活性化策をアドバイスしてきた小泉先生が、再生へのカギをにぎる取り組みを紹介してくれる。小学生からお年寄りまで、しっかりと道を切り開いているよ。



「すごい弁当力!—子どもが変わる、家族が変わる、社会が変わる」

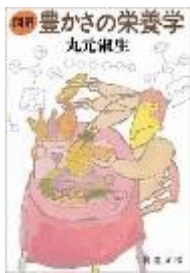
佐藤 剛史 (著) 五月書房

一昨日の夕食は思い出せなくても、弁当の思い出は、鮮やかによみがえる。心の中に弁当が刻まれている。それが弁当の力だ。きっとあなたも弁当が作りたくなる。人気コミック『玄米せんせいの弁当箱』にも関わった佐藤剛史が、あなたの「手づくり弁当」の思い出を、強い力に変える。



「日本人の栄養学講座—食べ物さん、ありがとう」

川島四朗/サトウサンペイ (著) 朝日新聞出版



「図解 豊かさの栄養学」 新潮文庫 丸元 淑生 (著)

『海底牧場』アーサー・C. クラーク (著) 高橋 泰邦 (翻訳) (現在はハヤカワ文庫SF)



古い本を読もうと題して、あるところでSFやミステリーの本の紹介をしたことがあって、その際同じ作者の本をいっぱいまとめて読んだ。

教訓は、同じ作者をまとめて読むのはやめたほうが良い。しんどかった。

作風やテーマを変えていろいろ読むのがよい。とは言え、

40年以上前に買ったものを、この機会に読めた。

この作者には珍しい海洋ものだが、牧鯨を国際的な事業として展開している未来、元宇宙士の主人公が、海底牧場練習生の時代から官僚になるまでの半生を通して、いろいろな問題に取り組む物語だ。

“21世紀、世界連邦食糧機構の海務庁牧鯨局は、食用の鯨を海で放牧し、人類の食糧需要量の1割以上をまかなうほどになっていた。” 人類が爆発的に増える未来には食材の確保が必要だ。そこには、反捕鯨や、動物愛護の精神は描かれていない。1950年代に書かれた小説は、未来の食糧確保のアイデア提案しているところが興味深い。人にとって何が重要かである。

(紹介 寺下邦彦)